

幼君輔佐之心得

口 9

3318

序



去五味均平藏

余幼而孤。乏師保之訓。今年垂五旬。百事無成。可勝慨哉。因念閱世家。多長于婦人之手。驕惰成性。不通下情。無知稼穡之艱難。往往來侮于下士者。職此之由。苟非培養之幼時。則不可也。茲刊迂齋稻葉氏所著幼君輔佐之心得。附以春水賴氏所述一志通惠為三冊。以示同志侯伯。使其君臣熟讀玩味。則未必無小補云爾。

安政二年暮春。節山板倉勝明識

安政二年春蒲山町合衆所

...

...

...

...

...



幼君輔佐之心得



其も賤しきも智愚賢不肖のちかち有く生れしものなり
あり猶人の面の如く數千百人の多きをあはれ品とあり同
く人知るといへ人の性の本善あり又水精の白く鏡の物なり
又の物をあつとく火のやけ水のうもほと如く仁義禮智の清
明ありと唐大和より今の陽あり友人の形小といへ心と天地
なり万物のちありとありといふも愚のありと生れしもの
学ひてあつと明ありといふは是ふなりといへ聖人の所代は学

校を設け置上天子諸侯の若きより下ハ庶人の残りキ老き至るまで
教をうけよといふことなり――後世ハ世衰ハ道微るうう――人の教はいふこと
人まれあうとハ位尊高く禄をき入れ只生つきのまり――何事も世
のあらううをよきものと思ひ人の臣あるものも具を輔佐せといふと
――君のよろた心な誅ふともあらなあ――君の善心あるといふと
育く成るふといふと只　公邊の勤世間の文りの事をのこし――
却も君の名聞利禄の心ないとあらいし――もとに自創の心ないと
かりきある三綱五常をさる事もあら遠く慮らない――

ふ君の過ちあらけ君の悪な長や――むとはもたく國家の治るは
くもくも乱の自多――から大臣はもと君はいふ――むと誠に――も
婦人女子の忠をふらくて大臣の職を――あらいし智者の笑を招き
あらうういふとあらむと滅に無下のあらない今世の中は人を君
の威やあらいし心をあらううのあら――あらいし邪をあらうう――誅ふからうう誅ふ
んと防ぐ人は或はいふ教の及らうう事もあらあらいしあらいし智恵をあらいし
幼君のいふとあらいし教のあらいし大臣は又ハ傳をもと人は才不徳の
君のあらいしあらいし後に歳長――徳をあらいし行はらう――あらいし――

大臣家老の歴々たる忠臣といふ下の誅世のきく一も辨
つて國家日々乱る國やうらむといふ時分やうく先やん角
やんを勝るの後悔ありと及ぶゆゑ一是誰の罪といふ
かこれ宰相の賢者の相ふめくふ実のきくも本あり盲人の堀溝を
おそふとまふかたきけぬか賢者の相ふめく又君の過ちおそふ不
義の陥めきくハ宰相の力ありといふや盲人の堀う墜君の惡きあり
いゝ誰うめやまうくやこれいゝ一伊尹周公の幼君を相うめい其
志の厚き所やうき文ありといふ一國の大臣幼君の傳ふく

心を入るべきあり

為人君止於仁とゆれいめといふある文^聖才能ありといふ人の上とく
仁心を悟けさうある人父母とある半能うん然れい君の仁
心ありい本とま一む一孟子^齊の宣王の二年の穀棘の
ふきのいさをを稱一程子東の哲宗幼きとれ手ありといふく驥ふ
氷を掛けき一半を麻なきといふのありい具はる君の仁
を養ふといふ一其仁心を思ふの本ハ君の孝弟の心ありけり
あり父母やむつめ一兄弟に親く先祖の厚き恩に常に忘る

をさるるやうに教ふもいふに教ふもいふに慎終追遠は父母兄弟の
喪と元祖の祭とが厚く勤る事と人君の弟一の勤とを論語
に見えいふ世の人君父祖の恩はとまれ我ら此身何ぞより来り此
大官大祿誰人より得る事辨はまのいふの樂はさるる飲
食衣服金銀器用の樂は心はさるる先祖の廟所祠堂を人といふ事
もさるるぬ君多しかくのかき君いふく遠き親族又ハ譜代の家
臣は親しきいふやましく領分の農工商の残きは恵むの誠
いふや世の愚いある人常に國家の長久を願ふも其本はさるる事

をさるるいふ人君何り國家の望むが人やは幸に鬼神
を祈り僧徒巫祝の言を信し門は武運長久息災延命の符を
かき禍をいふ人といふ愚いのある幼君の孝弟慈愛
く下を恵むの道は教ふを本とする

幼君素直の堅き生質といふも學問の力ある其本とする國家の政
いふを師とせしめて猶何の望むいふや凡人も學問を工匠
の曲尺なく舟子の舵あるがや所謂學問と必しも書をよむ
のみ限り古人の道は常に尋ねる自見をまきしき理は

明して自らよく知むるは世の人あり書をよむのまな学とし
て或は驕りをきく欲を助ふかへて心はききあひ人の怨をさる
の害多し猶薬を服して病をきく飲食をきいて脾胃が破
るゝ如く薬と食ふ人の身はききあひのまなとありく用されかへりて
害を招く学問も正しくぬ学の害ありきあり然れども学をききあひ
へと思ひよる学の邪正をききあひていふく学は正邪あり孔孟
程朱の学は正學といひ是を克己復礼三代聖賢正統の道といふあり世の
詩文博雜の俗学は誹謗甚だ六のききあひのまなとありのまなとあり

いふものありく学をききあひていふく陸象山王陽明の心学といふ近
朱程子朱子の学といふ自家の雜説をよむる学は其害甚しき
くききあひて人君の学をききあひて四書小學近思録のまなとあり
講習ありて其餘六經の書又か和漢の史傳をよみく徳初るに
異端の書其外雜書をききあひていふく只學正しく徳義あり師
をききあひて今世の半の書はききあひて道なきもの多し
勞而無功といふく

幼君のまな常にききあひて人を多く交るを第一の教といふく書を讀

外に数件の善ありとも邪方技巧の小人折節もとも君の欲をひき邪
知進めどもあれは千日の功も一日はむらふて何ぞ君の善をひき
あつていふや凡幼君は表ふ居りて賢士大夫の歴ふ文る付多く
要ふ居りて婦人女子は近く時寡きむらひて是といふ程子の言
ふ見へる世の中の人ハ君異端邪術のまゝの俗く又行儀惰弱ハ
——くむらひあつて大抵奥方ハ成長——乳母老婆も近く故
なり死も——一向奥をもちれ母公姉妹ハ遠くもの道なり此の
重き人倫の交りあれは毎日母公の安否は伺ひ孝行の道ゆへし

保事終る表もあつて——表をきひ常ハ奥より——君大抵明
君ももつていふ——人君ハ師傳保の官なり昨ハ常に教傳
君の徳儀を助けけり也——いふや——すめ保ハ君の保養の道飲
食起居の事なり此三ツの官ありて君の過ち寡——況や幼君ハ此職
片時もかくいふ才徳ある人をきひ昨の職ハ保傳の二ツを兼て勤
む——只近習の士をきひきふ——君邊に居る人邪智ゆ
——道理をいひの學政歸ふ人あれは君よりかゝぬ事也其害
終に國家人民に及ぶ——あつ正直は欲せむとて君をなぐりて學智

人をよしとんふと大臣師傳保の人心をそととも小人折角君の欲を
さめ其あつちのちのち只大臣のうあめあにて近傳の臣と
力あ合て君を助く唯一人の功を以て成すかた遠き慮りある人
あつちの用申すなめ心きいそ及の難く

人君と下の諫言を賢君といひ又明君といふをいふ利発聰
明の君なりとも一己の智を是と臣下の諫言を用ひ世の事を憚
るきと國家滅亡の道この外はあらん今世の中の人君をえんは智
あつち堅く^賢んずる人一己の智を我家老長臣の威をうけ凡政事其

家の長臣が問す近侍二人我欲を助くる臣の事と大臣の威目
々おとろ家法月々ふ乱り誰誰はさむる人もあつちある是人君自
威を遅るんとあつち人君威^衰ふと端あつちあつち中庸の元
経を敬大臣則不眩といふ孟子より不得罪於巨室といふは幼君のとき
あつちあつち家の長臣も幼君の爲かこ忠義の心は属し先己
を正しつて幼君の則となす

凡教いふやきをよしと大抵歳や長一分の物数奇き来て及ひか
あ道理も初めとつち一生の智とあつちあつち古人も先入とて歳

若き先小児を重しとん幼年よりとん世をへき歌舞戯狂言とて
好色淫乱を導く遊び又ハ吝嗇面々金銀財寶の利心又ハ血氣の
勇を来し人と常ハ人ハ侮るの類あり幼少より是等の心付け歳
の長するに随ひおくるもの悪事身より生じし小児の戯を指す
此其歳を考てゆへとて今小児の破魔弓を対人形をある程
まゐり春風紙鳶を遊ぶ如き成人のほかに世にあらはれ後の
曹より若しおハ解つて毎りに厳き法をみく小児の心をいふ
氣が漸め病を生じたり至る又謀の過るといふ一見草のむし

のあそび一は伝とある人ぞいふ

養生の方飲食をなめし氣血流通するをよしとて朝より事を初め
終日怠りなく夜ハ眠みきとておハ解つて病を生じたり至る又謀の過るといふ一見草のむし
ハ心氣鬱滞せん筋力健く血氣よくめぐりて病生ぜざるなり凡人怠り
おハ病多しといふとて戦國に人病寡く泰平の村人病多し今富
貴なる人十の七八まじり氣體弱く田夫野人氣体強し流水は虫を
生る戸樞虫をまゐるなり同し人君幼少より朝ハ夙より書紙
より手習より勤め其暇より馬ハ馳走し武藝の内より馬矢將

の第一とす。其外餘釵術のたふしものと云ふは、世の人君武藝を家業と覺へ、學問の志なきは、本末をたふしとて、學問の治國平天下の事あれ、人君第一の家業とて、六藝といひ、小學の教あれ、格別の事あり、されど讀書の暇、武藝を執言古より、されど血氣暫滞や、勇氣を失ふ一端と云ふ。世の人君若し、朝の起夜、酒宴遊興のみ、こふやう、又ハ名ヲ利欲、好色の爲あり、心氣を苦、脾腎虛脱、及ハ、いふ、是皆道ふ、世の人君、

好むを養生と、事を和み、不養生と、讀書は、病者あり、命もち、思ふと、思ふ、幼君は、この臣此は、

保養の道は、病生を、病起る、藥を用、平日保養、人の藥功も格別、幼君若病、藥功速く、爲るも良醫、病因詳く、藥法をよく、尋ねて、療治を施し、病發を、其機を察し、一人の庸醫は、任、今世の中、思ふ、人良醫を

るふと諒く——只陰陽師祈禱者の言を信し神水御符など
の惑ひ起——又醫者を擧ぐるも病功の能否は思ひん——或は日候
の方角候といふありぬ藥は用ひく病まり——重きに至る嗚呼哀し
む——事あり叔幼君病候ハ詔事勤め候ゆゑ読書手習諸藝等の
事も暫くせしむ専に保養せし——病平愈せば又勤め勵むべし若
し——一旦の病は驚きく是より一向の勤め候ふハ万日の功も益ぢか
ら——あつた海上は船をやもう如く難凡候ハ舟はたあつてし風
やまら又舟はた——一度風あ——きとく早く歸るはきや是より

心得あり——今奉公候はる人己う役儀の爲に昼夜心力を盡し
病おはとく仕を止むべきの理なり——蔭繪師彫物師縫白屋の如く
昼夜心氣は疲く——或は病起るもあつたかれども是已か家業を成
はし且煩はしあつとく其業は廢止の事なり——病に患きく事な
ら廢止ハ智慧ある人の常なり幼君を助る人候く此意をもちて
幼君を成はしめし読書手習并武藝ホウもあつとく厳め格はあつ目候
極め時を定く勤めあつ——幼君一人を責てはすも難きものあり
近侍の人々老若并交りともあつた勤めあつとすみあつなり只格

法より厳く其心智を削ぎれりて師傳に蔽ひたる
心生——誠の道より離れ凡人の心はまじきなり——さう移るゆゑ
いまだのあり幼君の義理の心感をもつて常に教ふまじき
二人の基を固を見る如く知るをわづらふる者なり——又基を
たふる人終日終夜もたれ倦るあり——凡法をのり守り理を知らる
者ハ七くハ法も秘し——今世の中は凡そ人に君を尊ぶの時才持て
多し其政あるとわれども年月がたれ其あと次汰もたれありゆゑ此
本知もつけし——て氣をいそぐ守るる有る幼君の側より常に学智



有る人いともく聖賢の道はさう——異端覇者の惑ひ来りぬ
りて預め防く——世の中に少くハ勞力ある君もわれと本知開けられ
或ハ不慮の禍あり又ハ親族の憂へありと泣きき氣よりめられ
佛の無常ふ惑ひ又富貴官禄の望もまじき世の毀譽褒貶ふ心動
き覇者の功利の流るる事——数千卷の書を流るる本知開けをたれ
なり人間の寶智慧ふまじきものなり——況や位高き人ありや
幼君や歳多け婚姻の孩ありてハつた縁家の風俗よりく女
子の徳もあらはれ婦徳あり人をえむて——今世の中を見るに

只名聞利欲を重し大官大祿又権門の家筋を求めし後の患
となり家の衰ふと慮り後悔するもの多し初め謀慮を
たり凡婦を娶ふは婿の家より稍小の女を娶ふと古人の教に
凡官録ひし人の女は夫の家よりき慎め心す又大官の官祿重き人
の女は慎みぬ今世の中多し奥方の勢強く家風乱まるを
多し男子多し女子は早に嫁ふ後悔するもの多し今権柄者
俗人の女又好色の交りより婦人家の政が乱る例多し古聖
人ありて戒め深きことなり初君の時より人君に此意をせしむ

志ありて大臣も此事は深く慮へ

君は正し教へと思ふ大臣は先已に正し古くして大学
校に入るより仕とふも己り知れ唐も徳を蓄めて後君の侍る
事なりされは孟子も大人能正君心之非といひ大人は徳を人にふ
たりありて学を教へて忠義の道を深き人平生君の爲ふ
心ありて智ありて人の古の道を探ねて先己り身が慎むとい
今世の中は君を求められ大臣慢りの心あり酒宴遊樂に
心を盡し或は利心賤賈の事といふ人の多し賄賂を乞ふ員偏

願の政あり――國家の恨を招き――家風日々にあられ終ふ國の滅
ふふあるはうかくの如きの家老長臣は先君の恩を忘る不忠不義
の人もん何う幼君輔佐の望とあらんや――又酒宴遊興の怠り
少く書讀のみ兵法武術の能あるはうかく國の思ひ君は品心
薄く己を正――て君は正しきを知るされ諺に所謂萬能一心
誠小扇子の思ふ如く如――

人君輔佐の心得本より――是に限る――は逐て忘るべき事な
――大抵此意は本より大なる遠のきは凡そ始はるべき事

事なり――よく終る――ことなり――形――輔佐の人なく此意は忘る
べき事なり――終る

元文丙辰十二月

稻葉正義識

幼君輔佐之心得終

一志通惠

幼君輔佐の心得ハ先其志のめりふ左右の人平道ハ一和ハ一学以
終始を成事とある一初むる事餘多ありといふ要務を
三條ハ約一志の九層の基成るもの其本礎とせん
あつたやとて承り及ひん

曾子曰。可以託六尺之孤。可以寄百里之命。臨大節而不可奪也。
君子人與。君子人也。

かゝる人ハ我ハ君子なりとて返して何りハ如何なる人ぞと存

い何分勇猛無双の人に見えど世の所謂勇猛のみや
今仁義の勇夫と云ふ其志益貴憂^憂育う力もうりふと能う蘇
秦張儀の利口も惑うす隙なく大事のおもふも小事を侮む
仁義を以て心肝とする人なれり加人情の通一物のゆゑれを知
いふにけある心りなりとく強とく横紙をたふる人あり本石^本の如き
のちもある人情の通あるとくも曲察苛察なるあり物のゆゑれを
知るとも婦女子のさまたるあり小事のさへおそろね未練の取乱
はもあり如此の人ハ倭奸の人ハ欺き固ひくも素よりめく小才俗

智の人ふつりう何やあれ有るありある人のいふくも輔佐の任
あるや祖々代々苦勞あされ持傳のふ大國を今も其身ふくもを
えられ數十萬人の上に立てあひくも実ん昔君と仰きつめく幼君を
立ちん市思ひもふくもあふん

僕臣正。厥君克正。后德惟臣。不德惟臣。

君ハ臣次第のちやあふくも幼君ハ其見習関習に任れ
させあふ必然のふくも左右侍御正人ある故專一りて才智藝能故
專一いふたりやふんハ才徳^{才徳}ニツきく用立ちやふんハ才徳全倫の

つゝ何のや分ちくつゝ徳勝ちある人を正人とやする習典智
長し習典徳成とも又幼成如天性習慣若自然ちと見えん幼君
目の増し智ひけあふに後いへる天然自然底あせ
めいりゆふ不正のやう習ひまへ不正の智あめい不正の
性おちひりあひあふ機と智と目先のやあへてあふ
老成人も驚き幼君とあへて其終老成の君かと嬉しくも難と思
ひあふに随ひあふ其やうを求め行いあふ下あふ
あふあふもあふに上下あふ機智より邪と智は育ち高慢と

なり驕奢となり天性はせとあひ勿体至極もあふ

一 左右侍御一和して輔佐調護とあひ勿論あふ人人心の面同し

あふあふあふあふ千差万別の物好き難あふも各蕭義は属あ

し君はあふあふの志は膠と漆の如く鉄石のあふあふ十人百人百

人百人あふあふ同心同徳あふあふ君子和而不同あふ一心の守りあ

あふあふあふ相和しあふ初あふあふあふ一和と不可申あ

一 謹教あふあふ各番あふあふあふ古人あふあふ各番あふあふあふ事

あふあふあふ其反は驕奢あふあふ驕奢あふあふ下あふあふあふの本あふあふ畏縮と

各番成るに至り可申は、何れも同じく各番の貪利を
成るに至り可申は、何れも同じく各番の貪利を
本とありや、左も古人の驕吝其勢相因といふ、又質直の人ハ佛
神ハ任セ巫覡符章咒詛妖怪ハ信ハ人目ハ忍ハく神ハた佛
ちありや、あの子侍目持あり、あの子侍ハ僥倖ハとめ入を臆
病ハあり、実徳を失ハ武氣ハ墜ス、此ハちく其止物ハ
心ハ一癖ハ生シて臣下の凶逆民の疾苦死ハいふ、上重キ葬
祭の事ハ夢ハ知ルセズ、諸事目ハ度方ハ取リ、物ハあるの

習ハリ、其弊婦人の言ハ信シて小人を近付ケ君子ハ信シ
小至ルに可思ハル、又正学俗学の差別も、博く書史ハ見テ忘
リハ信用ハ正道の害ハある多ク、此等ハ正人といハる内ハあり
矢ハく君徳ハ盡ス、一時の譏諂面諛ハ甚シ、外來の病
ハ治ハ安ク腹心の病ハ治ハ、いふに相互ハ糾ハ、可申ハ、
一玩好遊戯ハ、ちあり中ハ義理ハ失ハ、文武ハ失ハ、
ちあり可ハ、ちあり駈走ハ、筋骨ハ加ハ、ちあり話ハ、智見ハ、
ちあり性情ハ、成立の基ハ、ちあり、ちあり備ハ、ちあり

不唱一可也

一
学ハ人の人々々々々々明むる主めん書史に涉り古今を覧ま
其一端より詞章記誦八固よりいつたはるべし學に三學俗學の別を
免へりゆゑ其正學の中ありて學の要を悉くを第一なりけり君
君の徳ありとも臣々ありきれば君徳の不足と可や臣君々あり臣た
多うとも國其徳化を受されハ是又君徳の不足と可や臣君々あり
臣必は臣ありて國必其徳化を受るハ君道の全備ありて君徳の充
實ハ後代あるも光輝あるとも古人は是れ方寸の中を用ひて是

を四海の内ふ廣むとやん如此大道理ハ天地生々（き）盡未來際此外
道あり一分の自見成立を此大規成合點一放く目當成なり一真
一文字の蹈み迷くゆくゆくも仕官の身ゆくハ昔君成堯舜の君とあり
昔身其時ハ在りく斯く目出度より根成直ハ見まなりくハ昔昔人君
輔佐の人の志成立くかく布置くハ其ハ昔の事なり

一 古人幼君今日の學ハ他日天下の治乱ハ係ると云ハ人君と云ハも六ヶ敷を
を幼少より責むるは阿ふに學よりよく生い立ちをあらふ今日の地盤
をなすを他日天下の治乱ハ係ると云ハある民あるを

一 古人君の字ハ寛厚ナルを博覧多聞と云ふも大海百川
源流の量何れも君子小人ありて一の棄物なく萬民仁寿の
域ハ安堵なりとの意なりとの見へる

以上

右ハ頃且古今幼君輔佐の物語ハ私カ見所御尋小随ハ大筋書
付入タ覽任御上御二代御手前様も御父子同く御傳役成
多比類希なり御代御親父様御遺業と御手前様も御傳佐の功
小随ハ光輝ハ彌増可なり保傳世家なり私式浅学不才の料

簡書付の儀耻入に得共任仰謹く上は慮外愚悃御察可なり

十二月

頼 彌太郎

山田圖書様

七月七日得暇り而頼千秋外見舞やうきを在宿に緩々閑談大勢仕修
功角美君之傳と云仕修藝藩甚以正学流行を関し而屋敷に千
秋は講席を渡し藝侯府父子秋多初は臨席に有之由席百餘人有之
り候也、此を以て善次郎秋多傳役稻生要人而年寄役上拔擢し仰付其
此山田圖書多、仁市傳役、仰付本知八百石之士に當役かりし是輕同心
等も有之由圖書父山田兵太夫當藝侯之府傳役、仰付此の、而候も御
父子秋多傳役も父子修きし、仰付此を彼府家にも家と仕り、而由圖書
之方より千秋、而守役之心得方書付り、而相示り、此を頼と有之、い、此、

と中書出来仕居此間借寄通中へ寫し送り追入受覽可申指葉
正義先生之幼君輔佐之心得之一書之^後一編に尤當世之事情小以
以根を存し千秋弟子万四郎より中書狀差越し是も彼所國之學校講
習、仰付近頃異学之制禁有之正学、甚以諸士興起之敗中越し
玆數段故序中上へ力く重疊し上へ

箕浦右源次

山口信八郎次

一志通惠終

于時文久三年癸亥仲冬應無過君之囑和久山貞利
於加崋陣營中寫之

